

田原市図書館ふしぎ文学半島プロジェクト2017  
“ふしぎ文学の達人”が選んだ 「ふしぎ」 オススメ本

選者：金原瑞人氏（翻訳家・大学教授）

選者コメント

1. 『ぼくが死んだ日』 キャンデス・フレミング著 三辺律子訳 東京創元社 2017

◆荒れ果てた墓地で、それぞれ時代の異なる九人の子どもの霊が死んだときのことを語る……という、子ども向けのファンタスティックな物語？……という反応が返ってきそうだが、どれもかなり不気味で残酷……なのに、読後感はさわやかという不思議な連作短編集。

2. 『歩道橋の魔術師』 呉明益著 天野健太郎訳 白水社 2015

◆1979年のまだごちゃごちゃした台北の、ある歩道橋には、ありきたりのマジック用品を売る手品師がいた。ところがこの手品師は魔術師でもあるのか（英語でどちらも magician）ときどき、不思議な術をみせることがある。そんな歩道橋の魔術師の不思議を体験した子どもたちが大人になって再会して、そのときのことを語る。9編の連作短編集。

3. 『アオイガーデン』 ピョン・ヘヨン著 きむふな訳 クオン 2017

◆次々に人が失踪し、その貯水池には怪物が住むという噂さえ立つなか、すぐそばに住む3人の子どもは飢えてネズミまで食べるようになるのだが……（「貯水池」）。疫病が蔓延する都市の、ゴミに囲まれたようなマンションに閉じこもっている母親と息子の部屋に、腹を膨らませた娘がもどってきて……（「アオイガーデン」）。8編からなる短編集だが、とくに前半の4編は、現代というディストピアを、恐ろしいほどの迫力と、グロテスクなイメージで描き出している。気持ち悪くて怖いけど、読み出すと途中ではやめられない。

選者：東雅夫氏（アンソロジスト・文芸評論家）

4. 『辺境図書館』 皆川博子著 講談社 2017

◆今年（2017）は何故か「図書館＋幻想と怪奇」をテーマとする好著が相次いでいる。「ふしぎ文学」を標榜する田原市図書館の選書にはもってこいなので、その中から極めつきの三冊を選んでみた。『辺境図書館』は、現代日本における幻想文学の巨匠であり、練達の読書家としても知られる著者が、偏愛する作家と作品をくつろいだ調子で紹介した読書案内本。全体が妖しい物語仕立になっているのも、素敵だ。

## 5.『図書館情調』 日比嘉高編 皓星社 2017

◆こちらは、史上初の「図書館」をテーマにしたアンソロジーの試み。タイトルは萩原朔太郎の作品から。その名も「図書館幻想」と題されたセクションもあり、中島敦「文字禍」や宮沢賢治の「図書館幻想」といった定番に加えて、富永太郎「深夜の道士」や高橋睦郎の名品「図書館あるいは紙魚の吐く夢」といった詩篇、三崎亜記のファンタジー中篇「図書館」などが並んでいる。図書館で読めば、また格別。

## 6.『蔵書一代』 紀田順一郎著 松籟社 2017

◆著者は雑誌「幻想と怪奇」や〈怪奇幻想の文学〉〈世界幻想文学大系〉などの叢書を手がけた、怪奇幻想文学紹介の大いなる先達。その博識は文学のみならず近代史からIT関連にまで及ぶ。そんな著者が先年、三万冊を超える膨大な蔵書の処分を断行するに至った経緯と、その背景を成す平成日本の出版文化の衰退ぶり、さらには近現代日本における「蔵書」の意味を考察したのが本書である。全読書人、必読。

選者：小泉凡氏（小泉八雲曾孫・民俗学者）

## 7.『全国妖怪事典』 千葉幹夫編 講談社 2014

◆先進国の中でも、日本ほどアニミズム（精霊信仰）が残り、豊かな妖怪文化に彩られる国は稀だろう。本書は柳田國男以降の妖怪研究の伝統を踏まえ、民俗学や地方史などの文献に現れた七百余りの妖怪伝承を、都道府県別に整理し、その特色を紹介する有意義で資料価値の高い事典。「妖怪の国、日本」の実態が皮膚感覚で感じられる。

選者：島田尚幸氏（あいち妖怪保存会代表）

## 8.『異類婚姻譚』 本谷有希子著 講談社 2016

◆「溶け合う心が、私を、壊す」この作品を読んで、以前ヒットしたアニメ映画のコピーを思い出した。異なる二者が年月を経る中で、一の存在になる。一見甘く感じられるテーマである。しかし、本作で描かれるのは、単なる妥協—思考を手放した者の辿る残酷な現実—でしかない。醜と美。整と歪。脆く儂い、永遠。日常は決して安定の中にあるわけではなく、不安定な状態が連続しているだけの錯覚に過ぎないと感じさせられる一冊。



リストの8冊は、田原市図書館で貸出・予約可能な資料です。2017.8 作成